子どもの柔軟な発想に脱帽！

～「節度・節制」をいかに授業するか～

使用教材　「かぼちゃのつる」（光文書院　1年）

加藤　宣行

1．教材について

本教材は，低学年でおなじみ「節度・節制」の学習をねらいとした教材である。ストーリーは，好き勝手をして「自分の分」を守らないかぼちゃが，結果的にひどい目に遭うというものである。いわゆる，「因果応報，それみたことか」教材である。

そこから学ぶことは何か。普通に考えたら，「かぼちゃの失敗を生かして，自分はそうならないように気をつけよう」というような，教訓的な性質の論調になってしまうのではなかろうか。

2．発問の工夫

この教材を反面教師として扱うのではなく，よさを見つけ出す観点で読む（子どもに読ませる）ことはできないだろうか。それが私の問題意識であった。そこで，まずはかぼちゃのよいところを探してみた。どうしても自分勝手な悪いところばかりに注目されてしまうかぼちゃであるが，一つ見つかった。

それは，自らを解放しているところである。自由に生きているとも言える。私たちは，なかなか自由奔放に生きることはできない。もちろん，他人の犠牲の上に成り立つ自由はもってのほかであるが，そうでなくても無意識のうちに自分自身を型にはめてしまうことはないだろうか。その点，かぼちゃは，自由に生きる方向性こそ間違っているが，その「自分らしく生きる」気構えは捨てがたい。

そこで，そのあたりをテーマにして発問を構成することにした。つまり，「のびのび生きることはよいことであるはずだが，それがよいことになるときとならないときがある。その違いは何か」ということである。

そうしたら，なんとなんと，子どもたちは私の予想を超えて，かぼちゃの新たなよさを見つけ出したのである。

3．実際の授業

□教師側から投げかけたテーマ（問題）

> のびのびすることって，よいことですか。

・いいこともあればよくないこともある。

「では，このお話の中ののびのびはよいことかどうか考えながら読みましょう。」

・かぼちゃはまわりのことを考えないでのびのびしすぎている。

・すいかは人のことを考えながらのびのびしている。

> かぼちゃとすいかの違いは何でしょう。

・すいかはよいがまんをしている。

・かぼちゃはがまんしていない。

> すいかのようなのびのびをすることが，よいことなのですね。

・でも，かぼちゃの方がいいかもしれない。

「えっ⁉　どういうことですか。」

（この反応は私の予想に反するものだったので，少し戸惑った。）

・だってすいかが「おこられるからがまん」だったらあまりよくないよ。

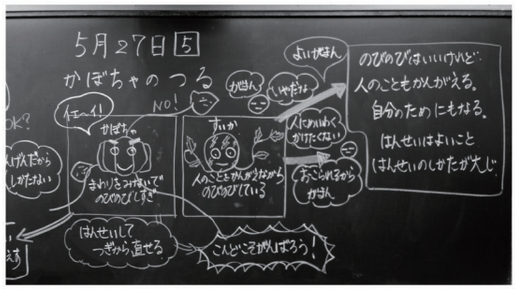
・だったら，かぼちゃが反省してよくなろうとしたら，その方がいい。

（ここまで聞いて，やっと子どもたちの言っていることが理解できたと同時に，「すごいな」とうなってしまった。）

「なるほど，確かに『おこられるからがまんしよう』と思って，自分の畑の中でじっとしているすいかだったら，反省して次からがんばろうと一生懸命直そうとするかぼちゃの方がいいね。」

・うん，私もそういうときがあるから……。

（子どもはなんて自由奔放に思考できるのだろうか。まいりました！）



「そのようなよいがまんをすることができると，どんなよいことがあるかな。」

・人のためだけではなく，自分のためにもなる。

・反省ができることはよいこと。その反省の仕方が大事。よくない反省だったら，またいけないことをくり返してしまうけれど，よい反省をすると，どんどんよくなる。

4．考察

発問を変え，一度子どもたちの思考をフラットにさせてから，よい世界を探させると，子どもたちは規定の概念を容易に乗り越えて，それこそ自由に発想し，「もしこうだったら」と教材に描かれている世界を広げ始めるのである。

そのような発想ができるようにするために，教師が授業中に行うべきポイントは次の二つである。

① 本（もと）の心から考えさせる。

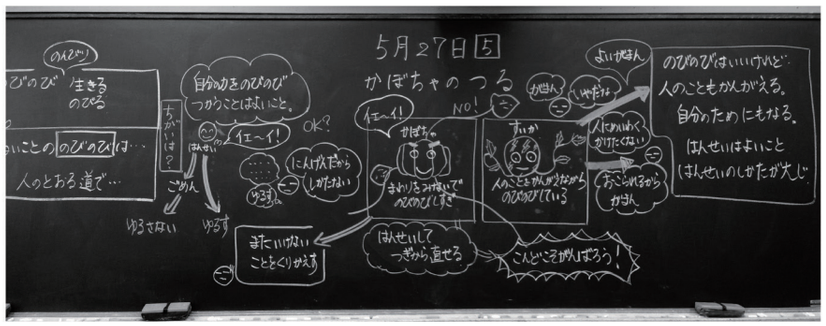
② 板書で図式化して子どもの思考をサポートする。

①は，行為・行動だけでは，その善し悪しはわからないということである。のびのびにしても，がまんにしても，それだけではよいとも悪いとも言えない。本（もと）の心があってこそ，よいのびのびにもなるし，よいがまんにもなる。人目を気にしたびくびくのがまんでは，他律的な価値観から抜け出すことができない。

②は，本（もと）の心と行為をつなぐ構造的理解を板書で見せてやることで，子どもたちは「ああ，そういうことか」というように，思考を促進させ，さらに新たな気づきを得ることができるようになるということである。その意味で，板書は授業の記録板というよりも，子どもたちの思考を広げるためのフィールドとすべきである。

5．まとめ

授業後，次のようなまとめを道徳ノートに書いてきた子どもがいた。

> 今日は，のびのび生きるというのはどういうことかについて考えました。さいしょ，私はただ自分の生活の中でよいことをすすめていくだけだとおもっていました。でも，どうとくのじゅぎょうをして，自分のすきなように，のびのび生きるのもいいけれど，人のことも考えて，もし，わるいことをしてしまったら，はんせいをする。そして，はんせいのしかたを考えるということがわかりました。これからも，「のびのび」を考えて，よりよいまい日にしていきたいです。

よりよい毎日のために，何をよりどころに自らの行為・行動を決めるかが大事であるということを自分なりの言葉でまとめている。このような，本時の学びを自分の言葉で言語化することも，道徳を教科として行うためのポイントだと考える。そして，自分なりに納得し，「いいなあ」と思ったことは，子どもたちは自主的に行おうとする。これこそが，道徳的判断力を伴う，道徳的実践力であろう。